

戦後初期日本におけるレスリングの 展開に関する一考察 —1950年代初頭の日米レスリングに着目して—

塩見 俊一*

本研究では戦後初期日本におけるレスリングの展開がもつ性格について、1950年と1951年の日米レスリングに着目し考察する。日米レスリングとは日本とアメリカのレスリング選手団による競技会であり、日本の数都市で日本アマチュアレスリング協会と新聞社が開催し、新聞等で報道された。本研究では日米レスリングについて以下の点を明らかにした。第一に、日米レスリングはヘルシンキ五輪のための選手強化と、レスリングの周知およびプロレスとの分離、つまりレスリングの大衆化を目的としていた。第二に、日米レスリングの大会やパレードは、観客に娯楽としても消費されていた。この日米レスリングの娯楽性は、レスリングの担い手が準備し、当時の人々の要求が下支えした。つまり戦後初期日本におけるレスリングの展開には、2つの側面がみられる。一方はアマチュアスポーツとしての国際社会への復帰であり、これは当時の日本の社会状況とも無関係ではなかった。他方、レスリングは当時の人々に観るスポーツ、つまり娯楽として消費されていた。日米レスリングは日本における大衆娯楽としてのプロレスの生成基盤の一つとなった可能性があり、また日本におけるレスリングの展開に一定の影響を与えたと考えられる。

キーワード：戦後初期、日米親善対抗レスリング大会、レスリング、選手強化、大衆化、娯楽性

問題設定

本研究の目的は、日本におけるアマチュアレスリング（以下、レスリング）の展開について考察をくわえることである。具体的には、1950年と1951年に実施された日米親善対抗レスリング大会（以下、日米レスリング）に着目し、その実像に迫ることで、戦後初期日本のレスリングが持つ性格の側面と、それらが切り結ぶ関係

について明らかにする¹⁾。

1950年代初頭の日本は第二次大戦後の占領末期にあたり、経済面ではインフレの克服とドッジラインによる不況から、特需によって立ち直りは始める時期であったという²⁾。また政治の面では国際的には冷戦構造が強まり、国内は1948年以降レッドパージと保守派閥の復権、警察予備隊による再軍備など、いわゆる逆コースの時代ともよばれ、1951年にはサンフランシスコで講和条約が締結され、翌年には占領の終了と安保体制への移行がなされる³⁾。このように当時の日本は経済、政治の面ではアメリカの影

* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

響の下、終戦直後の混乱期を脱し、復興に向けて歩み始めていたといえるだろう。

本研究で扱う日米レスリングとは、当時の日本のレスリング統括団体である日本アマチュアレスリング協会（以下、協会）に招かれたアメリカの選手団と、選抜された日本人選手によるレスリングの競技会であり、日本各地で大会が開催され、新聞等で報道されるなど、人々の耳目にある程度は触れるものであった。この日米レスリングに関する先行研究として、日米レスリングに選手として参加した永里（1952）が日本人選手の選出や試合の内容と結果、そしてレスリングの技術について考察をくわえている⁴⁾。また柳澤（2007）は、日本におけるレスリングの通史を描くなかで日米レスリングを含む1950年代前半の状況について、当事者へのインタビューを交えて述べている⁵⁾。このほか『日本アマチュアレスリング協会50年史』や、大学レスリング部の記念誌等にも、日米レスリングは簡潔にはあるが紹介されている⁶⁾。これらは本研究においても日米レスリングの内容や背景を知る上で示唆的であるが、一方で1952年に開催されたヘルシンキ五輪に向けた選手強化事業という側面が注目される傾向がみられる。たしかにレスリングは日本では大学生を担い手の中心として展開し、オリンピック等の国際的な舞台での活躍という面が注目されてきた経緯がある。また日本の国際社会への復帰は当時の日本社会全体の目標であり、日米レスリングもその社会的潮流のなかで実施されたといえよう。

しかしこのような視座からの考察では、日米レスリングが結果として同時代の日本社会に提供した多様な意味を明らかにすることは難しいと考えられる。なぜなら、戦後初期日本におけるレスリングの大衆化を巡る様相には、これま

で語られているオリンピックへの参加や、いわゆるエリートとしての大学生による活動のみでは語りきれない側面がある。なかでも日米レスリングの大会やそれに付随する催しにみられる娯楽性ともいべき側面は注目に値するだろう。結論を先んじれば、戦後初期日本におけるレスリングの展開には、オリンピックを目指すアマチュアスポーツとしての側面と、人々に消費される娯楽としての側面があった⁷⁾。この二つの側面とその関係は、戦後日本におけるスポーツのありようについて検討するうえでも重要であるとも考えられるにもかかわらず、少なくともレスリングについては管見の限りでは十分には考察がくわえられていない。また日米レスリングの基礎的な事実も未だ明らかではなく、これらを当時の資料から整理することは、日本におけるレスリング史の基本的認識を拡充することにもつながるであろう。

以上のことから、本研究では以下のように検討をすすめる。第1章では、戦後初期日本におけるスポーツの大衆化の状況と1940年代末までの日本のレスリング史を俯瞰し、そして日米レスリングの概要について述べる。第2章では、日米レスリングの担い手となった組織の性格から、同大会の目的を浮き彫りにする。第3章では、日米レスリングの大会とパレードに着目し、そこにみられる娯楽性についてその背景を含めて述べる。これらを通して、戦後初期日本におけるレスリングの展開に考察をくわえたい⁸⁾。

なお本研究では資料として、関係団体の年史、同時代の書籍、新聞や雑誌とあわせて、国立国会図書館所蔵のスクラップブック「八田一郎コレクション」（以下、八田C）から収集した当時のパンフレットやポスター等を用いる⁹⁾。

1. 日米レスリングの概要と背景

1-1 スポーツの大衆化

戦後、日本のスポーツは占領下の民主化政策のもとで再出発した日本体育協会（以下、体協）を中心に復興をはじめ¹⁰。その体協は、発足の当初から「オリンピック参加、高度化追求のみ」という意味でのオリンピック主義」（内海（1993），p.39）を本流としていたという。また関（1997）によれば、体協でも戦後初期には一部の選手に偏ったスポーツのあり方などを反省し、地方の組織やその活動を重視し広く大衆が担い手となる「スポーツの国民大衆化」が目指されたが、占領政策の転換と日本の国際社会復帰にも後押しされるように、体協はオリンピックを中心とする方向性を再び強めた¹¹。

このような実施するものとしてのスポーツの展開にくわえ、福田（1953）によれば、スポーツは、苦しい生活の中で日常的に実践する環境をもたない人々にとっても「観る」娯楽となり、また当時の大衆娯楽は人々を戦時中の禁欲的な雰囲気から解放するようなものであった¹²。これら、人々がスポーツを「観る」ものとして楽しむという状況は戦前からみられ、特に野球は戦前から大衆に娯楽として親しまれ、戦後にはスタジアムでの観戦やラジオ、新聞を通して人気を博していたという¹³。また読売新聞が6都市で行った調査によれば、1951年には23.7%の人が趣味や娯楽としてスポーツに興味をもち、プロ野球を好む人は40%を超えている（『読売新聞』1951年12月3日付）。つまり戦後初期の日本において、少なくとも「観る」スポーツの一部は、人々から一定の人気を得ていたと考えてよいだろう。

このように戦後初期日本のスポーツには、体協を中心にオリンピックでの活躍を目指す精鋭主義が標榜される、いわば戦前への回帰とも形容すべき状況があった。他方で、スポーツは「観る」娯楽として人々の間に広まりつつあったともいえるだろう。

1-2 レスリングの復興

レスリングは1931年、戦後も日本レスリング界の中心的人物となる八田一郎らによって日本に持ち込まれたが、その当時は柔道の余技でまかなえるものと考えられていたという¹⁴。それは日本初のレスリング実施組織となった早稲田大学レスリング部が柔道部と相撲部の有志を中心に設立されたことからわかるが、ともあれ、翌1932年には明治大学と慶応大学からも出席者を得て、大日本アマチュアレスリング協会が設立された¹⁵。つまりレスリングは大学という場で、大学生を中心的な担い手とし、柔道や相撲と関連し日本に持ち込まれたといえよう。

1932年のロサンゼルス五輪には大日本アマチュアレスリング協会以外からも講道館、そして八田とともに日本にレスリングを持ち込んだ庄司彦雄を中心に結成された大日本レスリング協会から各2名ずつ、計6名の選手が派遣された¹⁶。しかしロサンゼルス五輪後にはそうした「泡沫的レスリング倶楽部」（八田（1938），p.12）は姿を消し、大日本アマチュアレスリング協会を中心に日本のレスリング界が整備されていく。1934年に第一回が行われた全日本選手権は1941年まで連続して開催され、大学間の対抗戦やリーグ戦も1941年には6校が参加して行われ、1936年のベルリン五輪には5名の選手を同協会が派遣している¹⁷。このようにレスリングは、日本に持ち込まれてから約10年の間に、

二度のオリンピック出場や国内大会の定期的な開催など、一定のひろがりを持つに至っていたといえよう。

ところで日本のレスリング草創期にあたる当時、レスリングはプロレスやそれに近いものとしても人々に紹介されていた¹⁸⁾。前出の庄司が1931年に著した本の一節には、レスリングは「興味から云っても強さから見ても、アマチュアは、プロフェッショナルに遠く及ぶべくもない」(庄司ら(1931), pp.70-71)とあり、同書にはアメリカでのプロレスの試合やプロレスラーの写真が掲載されている。そして大日本レスリング協会は、一般の人々を対象としたレスリングの講習会を行った際に「プロフェッショナル」の技術指導も実施していた(『読売新聞』1932年7月23日付)。また、1937年7月にはロサンゼルス五輪出場者である加瀬清らによって職業レスリング協会が結成され、「アメリカン・プロフェッショナル・ルールに拠り」(職業レスリング協会(1937))試合を行う興行、つまりプロレスの興行が複数回行われている(『読売新聞』1937年9月30日付および10月15日付)。このようにレスリングは当時の日本ではオリンピックへの出場などを果たす一方で、プロレスとも混交している状況にあったといえるだろう。このようなレスリングの活動実態は、後に述べるように、戦後初期日本におけるレスリングの展開へも影響したとみられる。

時局が進み総力戦体制下になるにつれ、レスリングは敵性スポーツとして排斥されるが、名称を重技と変更するなどして生き残りを図る¹⁹⁾。また1938年には「国民精神作興体育大会」に参加し、「紀元二千六百年奉祝 明治神宮奉納レスリング大会」を実施している²⁰⁾。しかしその活動は徐々に縮小せざるをえず、1942

年の「第一三回学生レスリング大会」以降、目立った活動はみられない。

1945年に敗戦を迎えると、各大学のレスリング部が徐々に再集結し、協会が大日本レスリング協会から組織を継承して活動を開始する。その協会を中心に1946年11月には戦後初の全日本選手権が行われ、関東学生リーグが1948年に再開、そして1949年7月2日に協会は国際競技団体のFILA (Fédération Internationale des Lutttes Associées) に復帰する²¹⁾。

このようにレスリングは、日本では当初から大学生や各大学のレスリング部出身者が中心的な担い手となっていたことから、エリートによって担われたスポーツであったといえるだろう²²⁾。そして彼らの活動の中には、レスリングとプロレスが混在した部分が少なからずみられた。しかしこれらの一連の活動にもかかわらず、後に述べるように、レスリングは戦後初期日本においても人々に十分知られているとはいえなかった。このような状況の下、1950年と1951年に日米レスリングが開催されることとなる²³⁾。

1-3 日米レスリングの概要

本研究で扱う1950年と1951年の日米レスリングについて、その詳細を述べた先行研究は管見の限りない。そこでまず、日米レスリングの大会の概要、担い手となった組織、そして観客について、当時の報道や大会パンフレット、ポスターなどから一定整理したい。

日米レスリングの大会の開催日、会場、開始時間、料金、集客数、協力した新聞社、パレードの有無についてまとめたものが表1であり、この表1からは以下の日米レスリングの特徴が指摘できる。第一に、日米レスリングは東京、

表1 日米レスリング大会概要 1950及び1951年

日付	開始時間	会場	料金	集客数	主催、共催、後援等の新聞社	パレード
1950. 7. 15	18:00	東京都・芝スポーツセンター	100-200円	2,000-7,000	朝日新聞	
1950. 7. 19	18:00	神奈川県・ゲーリック球場	有料?	5,000	朝日新聞	
1950. 7. 22	18:00	東京都・芝スポーツセンター	100-200円	6,000	朝日新聞	
1950. 7. 26	18:30	愛知県・日活スタジアム	90-180円	3,000-4,000	朝日新聞	有
1950. 7. 29	19:00	兵庫県・甲子園大プール	100円	1,500-3,000	朝日新聞	有
1950. 8. 1	19:00	広島県・広島中央テニスコート	無料	4,000-5,000	朝日新聞	有
1950. 8. 5	16:00	宮城県・常盤木学院体育館	100-200円	数百	朝日新聞	
1950. 8. 9	18:00	東京都・青山レスリング会館	無料	1,000余り	朝日新聞	
1951. 7. 28	18:30	東京都・両国メモリアルホール	200-300円	3,000-10,000	読売新聞	有
1951. 8. 1	18:30	東京都・両国メモリアルホール	200-300円	4,000-7,000	読売新聞	
1951. 8. 3	18:00	千葉県・千葉市営競輪場	100-200円	2,000-5,000	千葉新聞、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、共同通信	有
1951. 8. 7	18:00	兵庫県・王子公園体育館	不明	3,000	神戸新聞、デイリースポーツ	有
1951. 8. 10	19:00	新潟県・白山市営球場	100-200円	5,000	新潟日報	有
1951. 8. 12	13:00	秋田県・秋田県記念会館	200円	不明(予想外に多かった)	秋田魁新報、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞	有
1951. 8. 18	18:30	愛知県・金山体育館	100-300円	不明	中部日本新聞	有
1951. 8. 24	18:50	東京都・後楽園競輪場	100-200円	2,500	不明(中央大学か)	
1951. 8. 26	19:00	東京都・後楽園パレーコート	不明	不明	読売新聞	

本表は筆者が以下の資料をもとに作成した。『日米レスリング大会パンフレット』、『日米レスリング大会ポスター』、『日米親善対抗レスリング大会チケット』(以上、八田C)、朝日新聞1950年7月9日付・8月8日付・8月10日付、朝日新聞神戸版1950年7月29日付・7月30日付、夕刊朝日新聞神戸版1950年7月29日付、朝日新聞名古屋版1950年7月26日付・7月27日付、夕刊朝日新聞名古屋版1950年7月26日付・7月27日付・7月30日付、中部日本新聞1951年8月16日付、日刊スポーツ1950年7月17日付・7月23日付・8月3日付・8月6日付・8月10日付・1951年8月25日付、スポーツニッポン1950年7月28日付・1951年8月9日付・8月25日付、神戸新聞1950年7月30日付・1951年8月6日付・8月8日付、河北新報1950年8月6日付、読売新聞1951年7月24日付・8月27日付、読売スポーツニュース1951年8月4日付、読売新聞中京版1951年8月17日付、日刊スポーツニッポン1951年7月30日付・8月3日付・8月5日付、報知新聞1951年8月2日付、千葉新聞1951年8月4日付、新潟日報1951年8月10日付・8月11日付、秋田魁新報1951年8月10日・8月13日付、夕刊中国1950年8月2日付・8月3日付・8月6日付、中国ジュニア新聞8月4日付、日本経済新聞1950年7月20日付、日刊オールスポーツ1951年8月7日付。なお、入場料は一般席の前売り価格を記載している。また1951年8月24日の大会の主催者並びに新聞社の関与については不明だが、同日のチケットには協会と中央大学の名前が記されている。

大阪などのいわゆる大都市のみではなく、広島や新潟といった地方都市でも実施された。第二に、全ての大会は観客を集めて実施された。第三に、ほとんどの大会が新聞社による共催や後援等の協力を得て開催されている²⁴⁾。また、日米レスリングの大会の内容は総じて類似しており、図1のようなパンフレットへの記載等によれば、入場式、来賓等の挨拶、選手紹介、模範試合や実演によるレスリングの解説、そして試合と閉会式というものだった²⁵⁾。

日米レスリングは、主に協会と新聞社を担い手として実施された。特にレスリング統括組織であった協会は、大会の運営等で主催者として中心的な役割を担っていた。また戦前

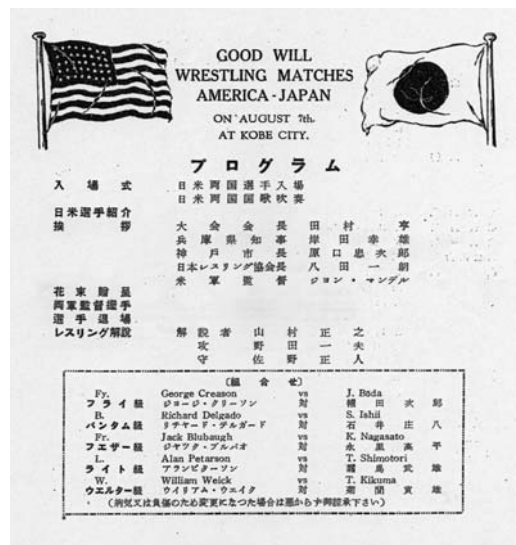


図1 『日米レスリングパンフレット1951年8月7日』

から協会とかかわりを持つアメリカのAAU (Amateur Athletic Union) レスリング部門が、アメリカ国内での選手の選考や派遣に携わっていたと考えられる²⁶⁾。

次に新聞社は、日米レスリングの大会を主催や共催、後援しており、1950年には大会開催やアメリカチームの滞在費用を協会と朝日新聞社が負担することが取り決められ、八田が「二回のアメロカ・チム招聘は、朝日新聞社、読売新聞社に大きな損をかけることによつて催された」(『アサヒグラフ』1953年10月14日号, p.22)とも述べていることから、資金を援助していたとみられる²⁷⁾。また日米レスリングは主催、共催等を行った新聞社以外の各社の紙面にその記事や広告が掲載されており、これらは日米レスリングに衆目を集めることに繋がったと考えられよう。つまり新聞社は、日米レスリングのスポンサーとメディアという二つの役割を担っていたといえるだろう。このほかに、開催地の自治体や教育委員会、体協の支部やレスリング協会は大会を主催や共催、後援し、パレードや晩餐会も開催しているが、その詳細な役割は明らかではない²⁸⁾。しかし日米レスリングは、自治体などの行政機関や地域社会によつても担われていた部分があったといえよう²⁹⁾。

一定期間のうちに数都市を移動し大会を実施した日米レスリングの、それぞれの大会における観客の詳細な像を把握することは難しい。しかし当時の新聞記事や入場料と会場、集客数から、その傾向を知ることはできるだろう。日米レスリングの大会の入場料は、表1のように有料の場合と無料の場合があり、有料の場合是一日のおとなの入場料は90円から300円であった³⁰⁾。会場は野球場、体育館、競輪場や種々のスポーツや催し物が行われる場所で、ほとんど

の大会で数百から10,000人程度の集客があったとみられる。そして日米レスリングの大会には、以下のような人々が訪れていた。

「会場の三分ノ一は異邦人、奥さん、子供さん連れ」(『日刊スポーツ』1950年7月18日付)

「男あり、女あり、鼻タレ小僧あり、アッパッパーあり浴衣あり、レスリングのレの字も知らざるもの」(『夕刊中国』1950年8月6日付)

「サラリーマンが目立った。ユカタ姿やワンピースのみずゝしい女性もチラホラと見え」(『読売スポーツニュース』1951年8月11日付)

「学生の団体はじめ熱心なファン」(『日刊オールスポーツ』1951年8月2日付)

「女性ファンの姿も相当見受けられた、また会場にはCIC隊長航空隊長夫妻をはじめ進駐軍多数も観戦」(『新潟日報』1951年8月11日付)

「情報部長はじめ進駐軍も多数観戦」(『秋田魁新報』1951年8月13日付)

このように日米レスリングの大会は無料あるいは高価とはいえない入場料で集客が可能な会場で行われ、そこでは男性、女性、こども、青年、壮年、外国人といった多様な人々が観客となっていた。つまり日米レスリングの大会の観客は性別、年齢や社会階層に限定されない、いわば大衆によつて構成されていたといえるだろう³¹⁾。以上のような日米レスリングの概要は1950年と1951年に共通しており、本研究では両年に行われた日米レスリングを一連のものとし、次章以降で検討をくわえる³²⁾。

2. 日米レスリング実施組織の性格と目的

2-1 実施組織の性格

本章では、日米レスリングの担い手となった組織の有した性格と、その目的について述べる。日米レスリングの中心的な担い手となった協会の有する性格のなかでも、本研究との関わりにおいて注目すべき点として、戦前、戦後を通じて国際的な場での活躍を目指していたことが挙げられる。1932年に協会の前身である大日本アマチュアレスリング協会が設立された際の宣言書には「日本人はレスリングに依つて、さらに世界のスポーツ界に発展する可能性があり（中略）レスリングに於ける独特の地位が、遠く海外にまで認められることになるのであります」（大日本アマチュアレスリング協会（1932））とある。さらに同年にロサンゼルス五輪へ選手を派遣していることから、大日本アマチュアレスリング協会がその発足当時から国際的な場での活躍、具体的にはオリンピックへの参加を目指していたことがうかがえる。協会は組織や人材とともに、この国際的な活躍を重視するという性格も戦後に継承したと考えられよう。

また、大日本アマチュアレスリング協会が1935年に加盟した大日本体育協会は、結成された当初から「名称は大日本体育協会でも性格はNOC（National Olympic Committee）そのもの、すなわち日本オリンピック委員会」（日本体育協会（1986）、p.113）であり、戦後にはオリンピック委員会が体協内に設立され、オリンピックにまつわる事柄を専門に取り扱うようになる³³⁾。その体協に協会は戦後も参加しており、1946年に戦後初めて選出された体協の評議員にも協会から1名が加わり、また体協が中心

となって実施された第一回国民体育大会でもレスリングは実施されている³⁴⁾。この協会と体協との関係は、協会が国際的な活躍への重視を戦後に継承したことを傍証するものであろう。このように協会は、特に1952年のヘルシンキ五輪への参加が現実味を帯びはじめた1950年代初頭から、「オリンピックへオリンピックへ」（八田（1953）、p.49）というオリンピック至上主義への傾倒を強めていったといえよう³⁵⁾。

2-2 選手の強化

ヘルシンキ五輪での日本のオリンピック復帰に関して、1949年の時点で日本は国際オリンピック委員会からの除名はされていないものの、各競技団体がそれぞれの国際団体に復帰する必要があったという³⁶⁾。既に国際団体であるFILAに復帰していた協会は、1952年のヘルシンキ五輪参加を見据えた活動を行う段階にあり、そしてこの時期に実施された日米レスリングは、二つの目的をもって実施されたと考えられる。その一つはヘルシンキ五輪に向けた選手の強化であり、もう一つはレスリングの日本国内での大衆化、具体的にはレスリングの周知とプロレスとの分離であった³⁷⁾。

日米レスリングでオリンピックに向けた選手の強化が目指されたことは、試合が行われた階級とルールから明らかである。大会では、両年ともに中・軽量級にあたるフライ級（52kg以下）、バンタム級（57kg以下）、フェザー級（62kg以下）、ライト級（67kg以下）、ウェルター級（73kg以下）の5階級で試合が行われている³⁸⁾。日米レスリングに選手として参加した、当時の日本を代表するレスリング選手である風間栄一によれば、レスリングは「各選手の重さによつてクラスが分かれており、体の小さい日

本人には他のスポーツと比べて割合公平に国際試合が出来る」（『新潟日報』1951年8月7日付）、つまり階級制によって体格差を克服しうる競技と捉えられていた。また日本のレスリング選手は「ミドルから上の三階級の選手がない」（『読売新聞』1950年7月14日付）状況であり、協会は日米レスリングに際しても「軽量のフライ、バンタムには自信があります」（『読売新聞』1951年7月15日付）と、軽量級に重きを置かざるを得なかったと考えられる。つまり日米レスリングは、目前に迫ったヘルシンキ五輪でも活躍が期待できる中・軽量級の選手強化の機会とされたといえよう。

日米レスリングで用いられたルールも、オリンピックでの活躍という目標に沿ったものであった。ヘルシンキ五輪では5人の日本人選手が上記の5階級で、レスリングの中でもフリースタイルのルールを用いた試合のみに出場したが、日米レスリングでも同様にフリースタイルの試合のみが行われた。そもそも当時、日本でレスリングはフリースタイルのみが行われており、もう一方のグレコローマンは実施されていなかったという（『読売新聞』1950年1月31日付）。少なくとも全日本選手権では1956年以前はグレコローマンの試合は実施されておらず、ヘルシンキ五輪でもグレコローマンは「後学の為」に出場が計画されたが、結局は棄権している³⁹⁾。さらに「この日米対抗レスリング試合もオリンピック・ルールを採用する」（『日米レスリングパンフレット1950年7月15日』、p.7）といった記載が両年のパンフレットにみられることから、フリースタイルのなかでも対戦国のアメリカ国内で用いられていたルールではなく、ヘルシンキ五輪で用いられるルールで試合が行われたことがわかる。この二つのルールには試

合時間や試合を決するフォールに必要な秒数などの差異があったことから、日米レスリングでの試合に際してアメリカ側には多少の混乱があったという（『日刊スポーツ』1950年7月17日付）。

このように日米レスリングは、国際的な活躍を目指す協会によって、オリンピックに向けた選手の強化を目的に実施されており、特にヘルシンキ五輪参加が決定していた1951年の日米レスリングは「五輪への腕試し」（『読売新聞』1951年7月3日付）という側面があった。ヘルシンキ五輪に参加した5名の選手全員が入賞し、バンタム級の石井庄八が金メダルを、フライ級の北野裕秀が銀メダルを獲得したという成績からすれば、オリンピックに向けた選手の強化という日米レスリングの目的は達成されたといえるだろう。

2-3 レスリングの大衆化

ところでこの当時の日本では、レスリングは多く人々に十分に認知されたスポーツではなかったと考えられる。1952年8月にレスリング部があった大学は東京に9校、関西に3校、愛知県と宮城県に1校ずつの全国で14校であり、同じく高校は全国で39校であった⁴⁰⁾。つまりレスリングは、日本での中心的な受け皿である大学、そして高校での活動状況から鑑みるに、「数度の海外遠征を経て技術水準は国際的に相当高度なものであるにもかかわらず一般にはあまり親しまれていない」（『夕刊中国』1950年7月27日付）のが実情で、これは協会にとって打破すべきものであり、レスリングの大衆化は重要な課題であったといえよう。ここでいうレスリングの大衆化とは、まず一つは人々にレスリングという競技を周知することであり、もう一つ

にはレスリングとプロレスを明確に分離して人々に認知させるということを指している。そして日米レスリングは、そのレスリングの大衆化の機会としても期待されていた。

まず日米レスリングの大会は、担い手が訪れた人々に直接レスリングを周知する機会となっただろう。大会では模範試合やルールの解説が試合に先立って実施され、また会場では試合の解説の放送が、1950年は少なくとも5大会で行われたと考えられる⁴¹⁾。そして大会で配布されたとみられるパンフレットにはレスリングのルールや歴史が記載されており、新聞記事には「マ生れて初めてレスリングの試合を甲子園リングで見た（中略）レスリングに対するマ智識は全然貧弱で会場で渡されたリーフレットの解説書を読んでからが私のマ智識の凡てである」（『スポーツニッポン』1951年8月3日付）といったものもみられる。つまり日米レスリングの大会は、レスリングが人々の目に触れる機会となり、そこでは担い手たちによって観客がレスリングをより詳しく理解するための努力がなされていたことがうかがえる。

また大会に訪れなかった人々にとっても、日米レスリングはレスリングに触れる機会となった。日米レスリングの大会は新聞に記事、あるいは告知や広告として掲載されており、それらは人々が直接大会を訪れなくとも、レスリングに触れる機会となっただろう。日米レスリングが実施された時期の新聞記事には、レスリングの歴史や国際的な情勢、ルールが解説されたものが両年ともみられ、練習や大会の様子も時には写真とともに掲載された⁴²⁾。また日米レスリングはニュース映画にもなっており、「この材料そのものの迫力が他を圧して」（『読売新聞』1951年8月11日付）一定の人気を得ていたとみ

られる⁴³⁾。くわえて一部の大会はラジオでの中継も行われ、1951年の新潟での大会は「QK（NHK新潟放送局。著者注）でも録音、午後十時から二十五分間ローカル放送」（『新潟日報』1951年8月10日付）されたという。このように、日米レスリングは新聞、ニュース映画、ラジオといったメディアを通じて人々の目に触れることでも、「新聞、ラジオで日本の快勝を知り初めてレスリングという競技があるんだなあー、そして日本は強いんだと認識をあらためた人が多かつたのではなかるうか」（『大阪日日新聞』1951年8月13日付）と、人々にレスリングを周知する機会となったといえるだろう。

一方で日米レスリングでは、レスリングとプロレスの分離もその目的となっていた。日米レスリングに際して行われた座談会のなかで、協会関係者が以下のように述べている。

「よくニュース映画に、殴る、ける、打つめちやめちやなレスリングが出てくるが、あれは職業選手で一種のショウだ、あのプロを見てレスリングは残酷なものだと誤解が多いようだがアマチュア・レスリングは決してあんな目なものではない」「この機会に一人でも大勢の人からレスリングを見てもらつて認識を改めてほしい」（『新潟日報』1951年8月7日付）⁴⁴⁾

このような当時のレスリング関係者の認識は、レスリングが十分に周知されておらず、他方プロレスは新聞やニュース映画等で戦前から人々の目に触れる機会もあったことからすると、的外れなものではなかつただろう⁴⁵⁾。日米レスリングの試合も、特にボクシング用のリングを用いた試合については「ニュース映画でおなじみのプロレスリング風景をちよっぴりしのばせ

た」（『毎日新聞』1951年7月29日付）といった記述もあり、人々がレスリングとプロレスを混同、あるいは同一視することも少なからずあったのではないだろうか。それに対する協会のレスリングとプロレスは異なるという主張は、大会のパンフレットにもみることができる。

「（ヨーロッパで盛んなグレコローマンと、アメリカや日本で盛んなフリースタイルの他に。筆者注。）此の他にもプロフェッショナルレスリングがあつてアメリカでは盛であるが、レスリングマッチでなくてレスリングショーである。最近ではすっかり見世物になつてしまつたが、見てなかなか面白いものである。」（『日米レスリングパンフレット1950年7月15日』、p.7）⁴⁶⁾

つまり当時の日本でレスリングを人々に広めるには、レスリングとプロレスをはっきりと分離する必要があり、協会は日米レスリングを、レスリングはアマチュアスポーツであり、ショーであるプロレスとは異なるものだという認識を広める機会としても捉えていたといえよう。

このように日米レスリングは、レスリングの周知とプロレスとの分離という意味での日本におけるレスリングの大衆化の機会として、担い手である協会からは期待されていた。この目的は十分に達成されたとはいえないまでも、日米レスリングは各大会への集客や報道によってある程度衆目を集めていたとみられることから、当時の日本におけるレスリングの大衆化に一定寄与したと考えてよいだろう。

以上述べてきたような日米レスリングのオリンピックへの出場を期した選手の強化と競技の大衆化という目的は、レスリングのみならず、当時のアマチュアスポーツの多くが有していた

目的であったといえるだろう。1948年のロンドン五輪では叶わなかったオリンピック復帰を目指すことは、体協を中心とする日本アマチュアスポーツ界の潮流であり、それは独立と国際社会復帰という、当時の日本社会の目標とも重なるものであったといえよう。また当時、多くの競技人口を得るなど、既に広く人々に受け入れられていた野球などを除いて、レスリングに限らず多くのスポーツが大衆化を目指す場合、まずは競技を人々に紹介する必要があったのではないだろうか。

3. 大衆と日米レスリング

これまで、日米レスリングについて担い手を中心に検討してきた。本章では、受け手である観客が、日米レスリングにどのように接していたのかという点を通じて、日米レスリングの実像に迫りたい。そこでまずパレードと大会について、観客となった人々の反応や、それを引き出した要因となったと考えられる点を指摘する。そしてそこにみられる日米レスリングの娯楽性ともいべき側面について、レスリングの担い手たちによる活動等の背景を交えて考察する。

3-1 パレードにおける人々の反応

表1のように、日米レスリングでは大会に先立つてのパレードが少なくとも1950年に3回、1951年には6回行われている。このパレードは協会や新聞社、地元の諸団体という大会と同様の担い手によって実施されていることから、日米レスリングの一部とあってよいだろう。そのパレードの内容は総じて、日米両国の選手やコーチ、監督等が自動車などの乗り物で市街地を



米レスリング団入京 紙吹雪浴び 銀座を行進

図2 米レスリング団入京
（『読売新聞』1951年7月24日付）

通過し、歓迎の式典が行われるといったものであったが、その様子は新聞では以下のように報じられ、また図2のような写真も掲載されている。

「マンデル監督を先頭に（中略）降り立つと松竹船橋スター井川邦子さんから美しい花束を贈られて（中略）オープンカーに分乗して田村町、新橋、銀座、日本橋を行進」（『読売新聞』1951年7月24日付）

「紺のハッピに白鉢巻き姿の車夫が引く人力車十五台をつらね広小路、通町、大町、五丁目土手長町とメインストリートを通過して」（『秋田魁新報』1951年8月10日付）

「米軍マンデル監督以下遠来のお客さんをねぎらうため、十日庁内から各六名のミス・レスリングを選定、秋田駅頭及び会場でそれぞれ花束の贈呈を行うことになった」（『毎日新聞秋田版』1951年8月12日付）

このパレードは大会前に実施されていることから、主な目的は大会の告知と考えられ、その点でレスリングの大衆化という担い手の目的に寄

与するものであっただろう。しかし人々がパレードに訪れた理由は必ずしもレスリングへの興味だけではなく、日本人とアメリカ人のスポーツ選手がオープンカー等に乗し、時には映画スターの歓迎をうけるというパレードを見物し、歓声やテープ、紙吹雪などで参加すること自体が、当時の人々を惹きつけたのではなかろうか。そして以下のようなパレードを報じる記事のなかには、人々がパレードそのものに娯楽として接していたともいえるような様子もみることができる。

「五彩のテープと紙吹雪の散る中を都民の歓声」（『読売新聞』1951年7月24日付）

「軒並みにつらねた日米両国旗の下で全市お祭りのような賑わいを呈した、この日一行は市川、船橋で歓迎をうけ午後一時数千人の観客に迎えられ県庁に着いた（中略）再びオープンカーで五色のテープ、打出しテープを投げかける万余の市民の波を縫って行進、スポーツを通じて日米親善絵巻が繰展げられた」（『読売新聞千葉版C』1951年8月4日付）

「つめかけた市民の歓声と拍手」（『夕刊新潟日報』1951年8月10日付）

このような人々の反応から、日米レスリングのパレードは、選手団の歓迎ならびにレスリングおよび大会の周知という目的で実施されると同時に、結果としてそこに訪れた人々や、報道を通してそれに接した人々にとっての娯楽となっていた可能性があるといえるだろう。

3-2 大会における人々の反応

日米レスリングの大会では、多くの場合図3のように観客はマットやリング等の試合場を囲



図3 日米レスリング大会写真
 (『サン写真新聞』1951年7月30日付)

むように配置されていたとみられる。図3は選手入場時の様子だが、観客が起立し、姿勢を正して会場中央のリングに向いている様子が見られる。一方でレスリングの試合に対する観客の反応には、「大鉄傘を揺るがす歓声のうちに開始され観衆は一試合ごとに熱狂」（『読売新聞』1951年7月29日付）や「観衆を興奮のルツボにひたらせ」（『夕刊新潟日報』1951年8月12日付）といったものもあったという。しかしこのような観客の興奮は、当時の人々のレスリングに対する理解の程度からすると、試合内容や技術のみによるものとは考えにくい。試合前のルール説明や試合中の解説があったとしても、人々がレスリングのルールを理解し、技術の優劣を判断し、それを楽しむことは難しかったのではないだろうか。

そこで日米レスリングが人々の興奮を引き出した要因を、新聞記事等を手がかりに指摘したい。

「広島地方初の国際試合で夜間試合でもあることから（中略）納涼ページェントを楽しんだものであった」（『夕刊中国』1950年8月6日付）

「場内に小さなスタンドがある。「オリンピック資金のために…」ペプシーコーラ、オレンジジュ

ス四十円、サンドウィッチ五十円也。暑気しのぎと、夕食時のため、そしてスポーツファンの五輪大会への関心と三拍子揃って飛ぶような売行き」

（『読売スポーツニュース』1951年8月4日付）

「ところは隅田河畔、ときは頃あい、夕涼みがてらに…とカバン片手に駆けつけ、ビール代りのコココーラに渴をいやす」（『読売スポーツニュース』1951年8月11日付）

「初の国際ナイターにたいする魅力」（『夕刊新潟日報』1951年8月11日付）

まず、日米レスリングが広島、千葉、新潟、秋田では初のスポーツの国際試合として行われたという点は注目に値するだろう⁴⁷⁾。戦後、スポーツは「観る」ものとして娯楽となったことは先にも述べたが、なかでも国際試合、特に日本とアメリカとの対戦は、人々の注目を集めたという（『読売新聞』1950年5月26日付。『夕刊毎日新聞』1951年8月16日付）。日米レスリングは「日米親善対抗レスリング大会」あるいは「日米対抗レスリング大会」という名称がポスターやパンフレットで用いられることも多く、全ての大会で日本人とアメリカ人による対戦が行われている⁴⁸⁾。このことが、日米レスリングに人々の注目を集め、また観客の興奮を掻き立てた要因となった可能性が指摘できるだろう。

大会名の他にも、たとえば新聞記事の中には「『勝利はわれらに』鼻息荒い両軍監督」（『読売新聞』1951年7月28日付）といった見出しや、「（アメリカチームの。筆者注。）アードイン監督が「今度こそ全部フォール勝だ」とうそぶいている程自信たっぷり。一方全日本軍も風間以下各級の選手権者を選びすぐったベストメンバーで、米国式戦術を研究したから今度は大接戦となること間違いあるまい」（『朝日新聞』1950

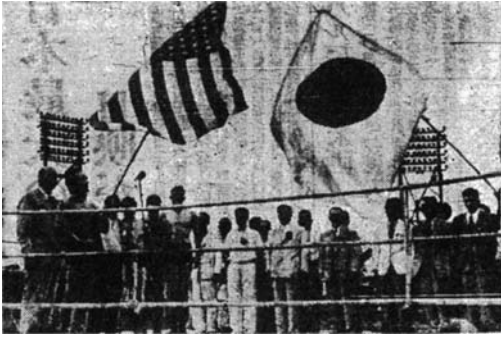


図4 日米レスリング大会の様子
（『日刊スポーツ』1950年7月29日付）



図5 『日米レスリング1950年8月5日
宮城大会ポスター』

年7月22日付)といった、日米の対抗戦であることを強調するような記述がみられる。くわえて図4のように、大会では両国の国旗が用いられ、管見の限りでは1950年8月5日の大会を除く全ての大会で両国国家吹奏がプログラムに組み込まれている⁴⁹⁾。また、図5のような大会のパンフレットやポスターでは、日本の国旗とアメリカの国旗は同じサイズで横並びに配置されており、これらは日米レスリングにおいて両国の対抗という図式が前面に押し出されていたこ

とを傍証するものであろう。つまり日米レスリングにおいては、未だ占領下にあるなかでのスポーツの国際試合、そして日米対抗という構図が、人々の興奮を引き出す魅力の一つとなっていたとも考えられよう⁵⁰⁾。

つぎに、日米レスリングでは夕方から行われた大会が大半を占めるという点に注目したい。表1のように1950年の7大会、1951年の8大会が18時以降に実施されており、そのなかには野外の会場で行われたものもある。日米レスリングと同時期の1950年7月に日本でのプロ野球初のナイター試合が後楽園球場で行われたが、それは昼の試合に比べて「入場者は二倍以上」（『報知新聞』1950年7月11日付）になる人気であったことから、ナイター自体が「真夏の夜の夢」（『日刊スポーツニッポン』1951年7月20日付）として人々の興味をそそるものであったといえよう。つまり夜間に行われた日米レスリングの大会もまた、野球のナイターと同様に夏の夜の娯楽となったとも考えられる。また夜間試合が行われている場所を訪れ、コーラやサンドイッチといったいわゆるアメリカの食べ物を食べることは、苦しい食料事情を抱えていた当時の人々にとって魅力となったのではないだろうか⁵¹⁾。この点において、日米レスリングの大会は観客にとってレスリングの試合を観戦することに留まらないものになっていたといえるだろう。

また、これら日米レスリングの大会では、以下のような観客の反応もみることができる。

「声援のはでなこと。“どうってことねえんだぜ！張り切ってやっつけちゃえ”（中略）“それ！そこだッ！”“続いて、もう一丁！”などはおとなしい方。但しGIさんや年若いシュベリアン達も適当

に興フンして勢のいい声援を飛ばす」（『日刊スポーツ』1950年7月18日付）

「自由党県議数名が酒気を帯びて現われ、下劣な野次を飛ばし」（『読売新聞千葉版C』1951年8月4日付）

このような観客の反応を、大会を運営する側、つまり協会を中心とする日米レスリングの担い手たちは「勇まし過ぎるヤジが飛ぶ度に国際試合に恥じぬような応援、つまり拍手を持ってお願いしたいと存じます……とくる」（『日刊スポーツ』1950年7月18日付）と、抑えようとしている。つまり、日米レスリングの観客は、ときには担い手の側が予想することのなかった奔放な反応をみせていたといえるだろう。

以上述べてきたように日米レスリングの大会では、占領下という状況で日米が対戦する図式が用いられ、夜に多くの大会が行われ、そこでは飲食物の販売なども実施されていた。これらは結果として、観客に日米レスリングを単なるレスリングの競技会として以上の魅力を持つものと感じさせることにつながったといえよう。そして日米レスリングの大会に人々が娯楽として接していたことは、いわば猥雑ともいえるような観客の反応からも垣間見ることができる。

3-3 レスリングの娯楽性

以上のように日米レスリングのパレードや大会は、娯楽としても人々に接されていたと考えられる。このような日米レスリングの娯楽としての側面は協会によって準備された側面がある。当時、協会は慢性的な財政難にあったとみられ、日米レスリングでのアメリカ人選手の待遇でも「東京の宿舎は入浴施設が不備で苦肉の

策として銭湯につれ出し、名古屋ではとうとう汚い宿舎をきらつてだだをこねられ、長良川の鵜飼見物に予定を変更した」という（『読売新聞』1950年8月10日付）。この状況を克服するために八田が「維持会員を募り一年間を通じてレスリング試合を見られるパスを一枚千円程度で発行することを考えている」（『報知新聞』1950年9月27日付）と語っていることから、レスリングの大会を人々に「観せる」ことは、1950年代初頭における協会の指針の一つであったといえる⁵²⁾。この、レスリングの「観る」スポーツとしての実施は、戦後初期にレスリングが復興を目指す際にもみることができる⁵³⁾。

1946年10月に新宿駅西口のヤミ市、通称ラッキーストリートで「新宿西口復興祭」が開催された（図6）。これは当時ラッキーストリートを取り仕切っていた、いわゆるテキ屋の組織である安田組による演芸や映画、歌謡、スポーツの試合などを行う催物でありながら、当時の商工大臣や東京都長官らが祝詞を述べるという、

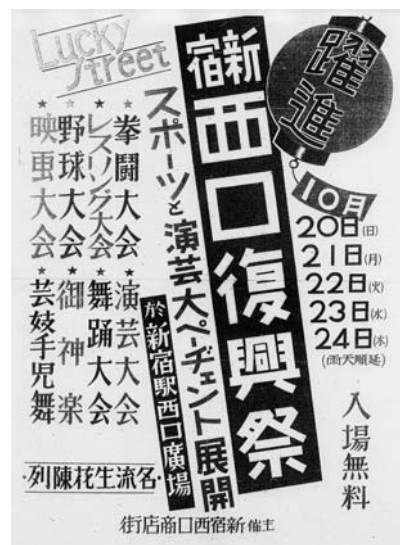


図6 (1946)『新宿西口復興祭ポスター』

当時の社会状況ならではのものであったが、そこでレスリングの試合が「各大学チーム出場」として行われている⁵⁴⁾。また同年、早稲田大学レスリング部は大阪遠征を行ったが、それは「金目当ての地方巡業」で「雰囲気としてはプロレスに近かった」もので、会場のボクシングジムには「闇市でボロ儲けした俄か成金」が多く来場し、試合後にはタバコのラッキーストライクや「銀シャリ、つまり麦などの混ざっていない白米100%の握り飯が大盤振る舞いされた」という（早稲田大学レスリング部70年史編集委員会（2000）、pp.50-53）。1949年の夏には早稲田大学と慶応大学のレスリング部が合同で北海道に遠征し、その際には「アメリカスポーツ世界選手権第三位風間栄一特別出場 柔道相撲レスリング飛入挑戦大歓迎 前売発売」（レスリング三田会（1986）、「グラビア 蘇る熱情」）の字が躍る看板が立ち、試合は「興行向きに派手な技を出し合うもの」（レスリング三田会（1986）、p.54）であったという⁵⁵⁾。この他にもレスリング部の記念誌や当時の新聞によれば、進駐軍の基地でも慰問としてレスリングの試合が行われ、たとえば関西大学レスリング部は1949年からその翌年にかけて米軍キャンプで慰問試合を実施し、その際には飛び入り歓迎の試合も行われ、試合後にはジュースやアイスクリームが振舞われたうえ、日当として5ドルが支払われたという（関西大学レスリング部OB会（1997）、p.79）⁵⁶⁾。

これらの活動は後に日米レスリングやヘルシンキ五輪に参加したレスリングの担い手たちと同じ、大学のレスリング部やその卒業生によって実施されていた。これらはいわば興行的な活動であり、ここではプロレスに近いような、あるいは飛び入り参加を認めるといった、娯楽性

を帯びたレスリングが行われてもいた。つまり戦後復興を目指すレスリングの担い手たちの思いと、観客となった当時の大衆の要求が「観る」スポーツという場で結びついたことによって、これまで述べてきたような日米レスリングにみられる娯楽性は準備されたものであったといえるのではないだろうか。そして日米レスリングも含めて、レスリングが娯楽として人々に消費されたことは、ヘルシンキ五輪における活躍に代表されるような、アマチュアスポーツとしてのレスリングの展開の一部に寄与したといえるだろう。

これまで述べてきたように、日米レスリングには二つの側面がみられた。一方は体協を中心とするオリンピックへの復帰と活躍を目指すアマチュアスポーツという性格であり、それは日米レスリングにおいてはヘルシンキ五輪に向けた選手強化と、日本国内におけるレスリングの周知とプロレスとの分離、つまりレスリングの大衆化という、協会が当時抱えていた目標によって醸成されたものであった。他方は娯楽としての性格で、パレードや大会は人々に娯楽として消費されてもいた。この、日米レスリングの娯楽性ともいべき側面は、戦後の苦しい生活を生き抜き、その中でレスリングを行う場を得ようとする担い手と、また受け手となった大衆が必ずしも豊かとはいえない生活の中で娯楽を求めたことによって育まれたものであったといえよう。そして大会やパレードが娯楽性を帯びることで衆目を集めたことが、占領下という状況で、新聞社や諸団体の協力を得て、日米レスリングという決して有名とはいえないスポーツであるレスリングの国際大会が二年連続して開催されることにもつながったとも考えられよ

う。つまり日米レスリングが有した二つの性格は、アマチュアスポーツと娯楽性という一見相反するものでありながら、少なくとも互いに阻害しあうものではなかった。むしろ日米レスリングは、この多様な性格が結晶化することで、当時のレスリング界が掲げた目的を達成しうるものとなっていたといえるのではないだろうか。

ところでこれらのレスリングの諸活動は、戦後初期日本における大衆娯楽としてのプロレスの生成とも関係しているとみられる。後に八田も「われわれのアマチュア・レスリングがオリンピックで金メダルを獲得したり、(中略)日本にレスリング熱が高まったところへ力道山があらわれたというわけで、すべてが好調の波にのったといえる」(八田(1955), p.51)と述べている。つまりレスリングの展開は戦後日本の大衆娯楽、具体的にはプロレスの成立基盤の一つとなったという可能性も指摘できるだろう。

結語

本研究では1950年代初頭の日米レスリングを中心に、戦後日本におけるレスリングの展開について検討した。そこで日米レスリングについて、以下のことが明らかになった。第一に、日米レスリングは1950年と1951年に協会と新聞社が中心となって日本各地で実施され、そこでは大衆といえる人々が観客となっていた。第二に、協会の日米レスリングでの目的はヘルシンキ五輪に向けた選手の強化とレスリングの大衆化であり、その大衆化とはレスリングの周知と、プロレスとの分離であった。第三に、日米レスリングのパレードや大会は娯楽性を有し、観客等の受け手は時には担い手の想定から逸脱

し、日米レスリングを娯楽としても消費していた。

戦後日本のオリンピックへの復帰は1948年からの占領政策の転換以降、GHQによっても行われた諸方面への働きかけや、オリンピック至上主義へ傾倒した体協によって推進されたという⁵⁷⁾。つまりオリンピックへの復帰は日本のアマチュアスポーツ界の願いであり、復興そして国際復帰という日本社会全体の願いとも重なる。国際復帰という日本の国家としての目標は、スポーツ界ではオリンピックへの「出場＝復帰」と「活躍＝復権」として、シンボリックに語られるものでもあっただろう。そして日米レスリングもまた、国際復帰を目指すというというイデオロギーの下に推進されたオリンピック至上主義に後押しされた事業であった。

その一方で日米レスリングにみられる娯楽性は、レスリングの担い手たちによって準備され、観客となった人々は日米レスリングに「観る」スポーツ、つまり娯楽としても接しており、それは日米対抗という図式に代表されるようなナショナルな感情と、苦しい生活の中で娯楽を求めるといいうわばある種の人間としての本能的な要求によって下支えされたものでもあっただろう。つまり戦後初期日本におけるレスリングの展開は、アマチュアスポーツとしての発展を目指すという性格と、観客やメディアを介して接した人々にとっての娯楽という二つの性格を有していた。これらの性格がみられる日米レスリングは、当時のアマチュアスポーツとしてのレスリングの展開に一定寄与したといえ、また大衆娯楽としてのプロレスの生成と無関係ではなかったともいえるだろう。

本研究では日米レスリングへの観察を通じて、戦後初期日本におけるレスリングが有する

性格の一端を明らかにした。しかし当時、レスリングの大衆化に大きな影響を与えたともみられるヘルシンキ五輪について、本研究では具体的には扱えなかった。また、レスリングの展開を通して戦後の日本社会を読み解く場合、1954年以降に大きなブームとなったプロレスとの関係も視野に入れて検討する必要がある。くわえて、当時のアマチュアスポーツと「観る」スポーツの関係や、国際大会におけるナショナルな感情と娯楽性については、同時期に実施された日米対抗水上大会、日米対抗陸上大会等とも関連付けて考察する必要がある。しかしながらこれらの点は本研究の範囲を超えるものであり、今後の研究課題としたい。

注

- 1) 日米レスリングの各大会の名称は異なるが、大会内容に差異が認められないため、本研究では区別せず日米レスリングと表記する。
- 2) 橋本 (1995), pp.94-101。
- 3) 歴史学研究会 (1990), pp.4-222。石川 (2004), pp.61-53。
- 4) 永里 (1952), pp.174-192。
- 5) 柳澤 (2007), pp.124-129。
- 6) たとえば日本アマチュアレスリング協会 (1982), pp.19-21。中央大学レスリング部 OB 会発行 (1996), pp.44-47。
- 7) 本研究においては、当時の日本において体協を中心としてオリンピック等の国際大会への参加や活躍を重要視していたとみられるスポーツに関する諸団体の活動をさして、やや限定的な意味でアマチュアスポーツという言葉を用いている。
- 8) 本研究が対象とする日米レスリングが開催された時期の日本は占領下にあり、その社会状況を鑑みれば、対日占領政策についても論じる必要がある。同大会や当時の日本におけるレスリングの展開についても、特にオリンピックへの復帰に関しては占領政策が関与しているとも

考えられる (日本体育協会 (1986), pp.104-106) (関 (1997), pp.86-93, pp.107-109)。また日米レスリングに際しても、実施主体となった当時のレスリングの担い手たちは「スポーツを通じ日本がアメリカに理解されれば望外の喜びとするところであります」(『日米レスリング大会パンフレット1950年7月15日』)と、アメリカからの眼差しを意識していたとみられる。しかしながら本研究では、占領政策のもとで実施された当時のレスリングの展開が、オリンピックへの復帰を目指すアマチュアスポーツとしての性格と、他方人々に消費された娯楽という性格の双方を有していたという側面に着目したい。また、本研究とも関連するアメリカの対日占領政策についての検討は重要であるが、今後の研究課題としたい。

- 9) 「八田一郎コレクション」はスクラップブックで頁は記載されておらず、また一部はフィルム化されており、本研究ではその双方から収集を行ったため、資料番号等は記載していない。
- 10) 『日本体育協会75年史』によれば、日本体育協会は1911年に大日本体育協会として設立され、1941年から大日本体育会、1948年から日本体育協会と名称が変化している。
- 11) 関 (1997), pp.93-101。
- 12) 福田 (1953), pp.226-231。
- 13) 村上 (2000), pp.223-241。
- 14) 八田 (1938), p.10。
- 15) 日本アマチュアレスリング協会 (1982), p.2。
- 16) 講道館もレスリング部を設立し、1932年のロサンゼルス五輪に選手を派遣している (日本アマチュアレスリング協会 (1982), p.3)。
- 17) 日本アマチュアレスリング協会 (1982), pp.6-14。
- 18) 1931年の早稲田大学レスリング部による初の公開試合は、リングが用いられ、俳優が参加して漫談などを行うといった催しであり、入場料も徴収された (日本アマチュアレスリング協会 (1982), p.2。(1932)『1st WRESTLING MATCH チケット』。『読売新聞』1931年6月11日付)。
- 19) 日本体育協会 (1986), p.96。

- 20) (1938)『国民精神作興体育大会パンフレット』, (1938)『明治神宮奉納レスリング大会パンフレット』。このほかにも、1939年に実施されたレスリング大会のポスターには「国民精神総動員」(1939)『米比遠征軍対抗帰朝歓迎大試合ポスター』という記述がみられ、また1940年には将兵慰問レスリング競技会も実施されたとみられる((1940)『十一月十四日命令別紙 将兵慰問レスリング競技会実施要綱』)。このように、レスリングは時局の中で生き残りを図っていたといえよう。
- 21) 日本アマチュアレスリング協会(1982), p.18。なお、大日本アマチュアレスリング協会は1940年11月に大日本レスリング協会と改称し、その組織が人的な連続性を含めて戦後の協会に引き継がれている(日本アマチュアレスリング協会(1982), p.13)。
- 22) 戦前の新聞記事にも「欧州のグレコ・ローマン型を中心としたレスリングは労働階級のスポーツであり、米国、日本で盛んな自由型(フリースタイル。筆者注。)は学生やインテリのスポーツであり、競技の上にもたしかにその気質が表れてゐるやうだ」(『報知新聞』1937年7月7日付, 八田C)とある。
- 23) 1951年の2月と12月に、協会が選抜した日本人選手が渡米してレスリングの試合を行い、それは日本国内でも新聞で報道された(日本アマチュアレスリング協会(1982), pp.20-21)。これは選手の強化やレスリングの周知という面でも、日米レスリングと一定のつながりを持つ事業といえよう。
- 24) 1951年8月24日の大会は、管見の資料からは新聞社の後援などは確認できない。
- 25) たとえば『読売新聞』1951年7月29日付。
- 26) 戦前の1937年、1938年に行われた日米レスリングの際に来日したコーチはAAUの理事を務めており、また『報知新聞』1950年7月8日付によれば、協会とAAUを結ぶ個人間の関係は戦後も維持されていた。
- 27) Box no.5725 folder no.15 no.775017 “General HEADQUARTERS SUPREME COMMANDER FOR THE ALLIED POWERS APO500”。
- 28) たとえば1951年8月3日の千葉大会のパンフレットでは、協会と千葉県、千葉市と両教育委員会、千葉県体育協会が主催となっている。
- 29) このほかにも地域社会と日米レスリングの関係が、パンフレットや新聞に掲載された広告にみることができる。たとえば『日米レスリング大会パンフレット1951年8月3日』にはスポーツ用品店、薬局、喫茶店、雑貨店、クリーニング店、徽章製作所、病院、デパート、銀行、電力会社、旅館、レストランといった様々な業種の広告が掲載されている。その際の協賛金等の有無は定かではないが、日米レスリングと地域との一定のつながりを示すものではあろう。
- 30) 当時の日米レスリングに類似した娯楽に必要な費用は、野球の入場料が50円から200円程度(『読売新聞』1950年9月6日付)、映画の入場料が100円程度(『夕刊朝日新聞』1950年7月15日付)であり、これは日米レスリングの入場料と大差は無いといえるだろう。
- 31) 本研究ではこのような性質の人々を大衆として捉えている。なお、本来はこれらの人々の社会階層や男女構成、年齢構成などについて調査し、どのような階層の人々が観客となっていたのかを実証すべきだが、本研究ではその重要性は理解しつつ、資料から明らかにできていない。この点については、今後の研究で精緻化したい。
- 32) 1950年と1951年の日米レスリングを完全に同一視することはできない。両年のあいだにみられる共催の新聞社や、ヘルシンキ五輪への参加が確定していたかという差異には注意を払いつつ、本研究ではこの2回の日米レスリングに一連の事業として着目している。また戦前および1952年以降に行われた日米レスリングとの関係については、本研究では範囲を超えるものとして扱わない。
- 33) 日本体育協会(1986), p.109。
- 34) 日本体育協会(1986), p.444, p.493。
- 35) またアメリカ側の担い手であったAAUは、当時アメリカにおいてオリンピック委員会に大きな影響力を持つ「国際的なスポーツ統括団

- 体」（レイダー（1987），p.175）で、「名実ともにアメリカの中心的なスポーツ機関」（小田切（1982），p.162）となっていたという。
- 36) 日本体育協会（1986），pp.104-105。
- 37) 本研究においては、情報を発する側が広くその情報を行き渡らせようとするという、やや限定的な意味で周知という言葉を用いている。
- 38) この階級の区分と体重は『日米レスリング大会パンフレット1950年7月15日』および『日米レスリング大会パンフレット1951年7月28日』に記載されている。
- 39) 日本体育協会（1953），p.293。
- 40) 日本アマチュア・レスリング協会（1952），p.272。
- 41) 1950年の各大会については、大会パンフレットに試合の解説があったことが記されている。1951年については、試合中の場内放送があったかは定かでないものの、8月21日の大会を除いて、模範試合とその解説がプログラムに組み込まれている。
- 42) たとえば『読売新聞』1950年7月9日付、『報知新聞』1951年7月25日および26日付、『読売新聞』1951年7月22日および29日付。
- 43) やや時期は異なるが、1954年に日本で開催されたレスリング世界選手権のニュース映画の広告には、「日本がんばれ！北野頑張れ！笹原頑張れ！世界15ヶ国91名の超男性美が闘魂の限り力の限りくりひろげた熱戦連続譜！選手権の詳細早くも銀幕に登場」（『オールスポーツ』1954年5月31日付）といった記述がみられる。
- 44) これらの発言は新聞に掲載された座談会の中で行われたもので、前半部は協会理事の林正平、後半部は新潟レスリング協会長の師尾源蔵の発言である。
- 45) 戦前からプロレスはニュース映画や新聞である程度人々に紹介されており、その内容は試合の様子（『読売新聞』1937年12月11日付）やランキング（『読売新聞』1937年1月30日付）、女性同士のプロレス（『読売新聞』1937年8月1日付）など多様であった。
- 46) これと同様の記述は、1951年のパンフレットにみられる。
- 47) 『夕刊中国新聞』1950年7月27日付、『読売新聞千葉版』C1951年8月4日付、『新潟日報』1951年8月3日付、『秋田魁新報』1951年8月10日付。
- 48) 日米レスリングのポスターやパンフレットによれば、1950年の5大会が「日米対抗レスリング」となっており、1951年の6大会が「日米親善対抗レスリング大会」やそれに近い名称を用いている。
- 49) 国旗は、会場内のポールやクラブハウスに掲揚されることもあり（『夕刊中国』1950年8月3日付、『日米レスリング大会パンフレット1951年8月10日』）、また、「両国選手は国旗を先頭に入場」（『読売新聞』1951年7月29日）することもあった。
- 50) 日米対抗という図式が観客に興奮をもたらしたという点については、吉見（2007）が指摘しているような、親米や反米という二項対立的な構図にはおさまらない、当時の日本人がもつアメリカへの複雑な感情との関係性を含めて考察する必要がある。人々は日米レスリングにおける日米対抗の図式に興奮を覚えつつ、同時にコーラやサンドイッチといった食べ物や、レスリングそのものといったアメリカの文化やその雰囲気を楽しんでいたともいえるだろう。この点についてはさらなる検討を要するが、ともあれ、日米レスリングがスポーツを「観る」空間として、当時の人々のナショナルな意識に働きかける、あるいはその意識が表出する場となっていたという可能性は指摘できるだろう。
- 51) 当時、スポーツの国際試合観戦では食事の魅力のひとつとなっており、1949年にアメリカから野球チームのシールズが来日し国際試合を行った際、入場客はコーラなどのアメリカ製食品を日本円で自由に買うことができることが大きな魅力であったという（池井（1976），pp.109-111）。そして人々は球場で野球を観戦しながらアメリカの食べ物を食べることで「入場券を入れて三百五十円でも全くアメリカ気分が満喫」（『読売新聞』1949年10月18日付）できたという。
- 52) 1950年の日米レスリングでの収益は協会に帰

することとなっていた (Box no.5725 folder no.15 no.775017 “General HEADQUARTERS SUPREME COMMANDER FOR THE ALLIDE POWERS APO”).しかし「新聞社に大きな損をかけることによって」(『アサヒグラフ』1953年10月14日号, p.22) 実施したという八田の発言からは、日米レスリングが協会の財政難を救い、潤沢な資金をもたらしたとは考えにくいだろう。

- 53) 戦前にも日米レスリングは二度開催され、1937年は東京の日比谷音楽堂で2大会と兵庫県西宮球場で1大会、1938年は兵庫県、京都府、愛知県、新潟県で各1大会、東京の日比谷音楽堂で2大会を実施し、くわえて同年の全日本レスリング選手権大会には日米レスリングに参加したアメリカ人選手も参加している。これらの大会も新聞社による後援、1940年に予定されていた東京オリンピックへの意識、また広告に掲載された文言にみられる「全日本軍対アメリカ軍最後の決戦」((1937)『日米レスリング広告』)という図式などは、担い手の連続性を鑑みても戦後の日米レスリングに継承されたと考えられよう。しかし本研究で着目している娯楽性については、管見の資料からは両者を同一視することは難しいため、日米レスリングの戦前と戦後の連続性については可能性を指摘するに留め、今後の課題としたい。
- 54) (1946)『新宿西口復活祭レスリング大会ポスター』。(1946)『新宿西口復活祭パンフレット』。
- 55) このほかに早稲田大学レスリング部は1947年にも北海道遠征を行い、その際にはチケットを販売している ((1947)『早稲田大学レスリング部試合チケット』)。
- 56) 中央大学のレスリング部も、進駐軍への慰問として試合を行ったという (中央大学レスリング部OB会 (1996), pp.43-44)。また早稲田、明治、中央各大学の選手は日刊スポーツ社主催の「GI慰問レスリング模範試合」(『日刊スポーツ』1947年5月27日付)に参加した。
- 57) 内海 (1993), pp.39-49。

史料・文献

- 八田一郎コレクション資料 (国立国会図書館所蔵)
大日本レスリング協会 (1932)『趣意書』
大日本アマチュアレスリング協会 (1932)『宣言書』
関東アマチュアレスリング協会 (1946)『新宿西口復興祭レスリング大会パンフレット』
日本アマチュアレスリング協会・中央大学 (1951)『日米親善対抗レスリング大会チケット 8月24日』
日本アマチュアレスリング協会ほか (1950)『日米レスリング大会パンフレット 7月15日, 7月19日, 7月22日, 7月29日, 8月1日, 8月5日』
— (1950)『日米レスリング大会ポスター 7月29日, 8月5日』
— (1951)『日米レスリング大会パンフレット 7月28日, 8月1日, 8月3日, 8月7日, 8月10日, 8月12日, 8月18日, 8月21日』
— (1951)『日米レスリング大会ポスター 7月28日, 8月1日, 8月10日』。
職業レスリング協会 (1937)『第一回興行パンフレット』
早稲田大学レスリング部 (1932)『1st WRESTLING MATCH チケット』
— (1947)『レスリング公開試合チケット』
(1937)『日米レスリング広告』
(1938)『国民精神作興体育大会パンフレット』
(1938)『明治神宮奉納レスリング大会パンフレット』
(1939)『米比遠征軍対抗帰朝歓迎大試合ポスター』
(1940)『十一月十四日命令別紙 将兵慰問レスリング競技会実施要綱』
(1946)『新宿西口復興祭ポスター』
(1946)『新宿西口復興祭パンフレット』
- プランゲ文庫資料 (国立国会図書館所蔵)
Box no.5725 folder no.15 no.775017 “General HEADQUARTERS SUPREME COMMANDER FOR THE ALLIDE POWERS APO500”。
- 新聞
秋田魁新報 (1951), 秋田魁新報社
朝日新聞 (地方版を含む) (1931-1952), 朝日新聞社

千葉新聞（1951），千葉新聞社
 中部日本新聞（1950-1951），中部日本新聞社
 中国ジュニア新聞（1950），中国新聞社
 中国新聞，夕刊中国（1950），中国新聞社
 報知新聞（1950-1951），報知新聞社
 河北新報（1950），河北新報社
 神戸新聞（1950-1951），神戸新聞社
 毎日新聞（地方版を含む）（1949-1951），毎日新聞社
 日本経済新聞（1950-1951），日本経済新聞社
 新潟日報，夕刊新潟日報（1951），新潟日報社
 日刊オールスポーツ（1950-1951），新港新聞社
 日刊スポーツ（1950-1951），日刊スポーツ新聞社
 大阪日日新聞（1951），新日本海新聞社
 サン写真新聞（1951），サン写真新聞社
 スポーツニッポン（1950-1951），スポーツニッポン新聞社
 読売新聞（地方版を含む）（1931-1952），読売新聞社
 読売スポーツニュース（1951），読売新聞社

●同時代のレスリング関係文献及び記念誌

中央大学レスリング部OB会発行（1996）『中央大学レスリング部50年史』
 八田一郎（1938）『レスリング』，成美堂書店
 一（1953）『レスリング』，旺文社
 一（1955）「力道頑張れ！」『月刊プロレス1（2）』，ベースボールマガジン社
 関西大学レスリング部創立30周年記念誌編集委員会編（1977）『関西大学レスリング部創立30周年記念誌』
 永里高平（1952）「日米対抗戦」日本アマチュア・レスリング協会編『レスリング世紀の闘い』，双葉書房
 日本アマチュア・レスリング協会編（1952）『レスリング世紀の闘い』，双葉書房
 日本アマチュアレスリング協会50年史編纂委員会編

（1982）『日本アマチュアレスリング協会50年史』

レスリング三田会発行（1986）『若き血に燃えて 慶応義塾体育会レスリング部五十年史』
 庄司彦雄ら（1931）『レスリング』，三省堂
 早稲田大学レスリング部70年史編集委員会編（2000）『早稲田大学レスリング部70年史』

●文献

橋本寿朗（1995）『戦後の日本経済』，岩波書店
 福田定良（1953）「戦後の大衆娯楽」『青年心理，4（3）』，金子書房
 池井優（1976）『白球太平洋を渡る』，中央公論社
 石川真澄（2004）『戦後政治史（新版）』，岩波書店
 高津勝（1994）『日本近代スポーツ史の底流』，創文企画
 村上浩介（2000）「野球」鶴飼正樹他編『戦後日本の大衆文化』，昭和堂
 日本体育協会（1953）『第十五回オリンピック大会報告書』，財団法人日本体育協会
 一（1986）『日本体育協会75年史』，財団法人日本体育協会
 小田切毅一（1982）『アメリカスポーツの文化史』，不味堂
 レイダー・ベンジャミン・G著，平井肇訳（1987）『スペクテイタースポーツ』，大修館書店
 歴史学研究会編（1990）『日本同時代史第2巻』，青木書店
 関春南（1997）『戦後日本のスポーツ政策』，大修館書店
 内海和雄（1993）『戦後スポーツ体制の確立』，不味堂
 柳澤健（2007）「日本レスリングの物語第2回」『fight & life（4）』，フィットネススポーツ
 吉見俊哉（2007）『親米と反米』，岩波書店

Review of development of wrestling in early postwar Japan:
Japan vs. U.S wrestling games in the early 1950's

SHIOMI Shunichi *

Abstract: This study clarifies other characteristics of wrestling in early postwar Japan by focusing on the *Japan vs. U.S. wrestling games* (including wrestling matches, ceremonies, and parades by Japanese and American wrestling teams) held in 1950 and 1951. *Japan vs. U.S. wrestling games* were played in some cities of Japan. They were held by the *Japan Amateur Wrestling Federation* and newspaper companies. The events were seen by spectators, and reported by the newspapers. This study highlights two points. Firstly, the *Japan vs. U.S. wrestling games* were played to strengthen players for participation and good results in the Helsinki Olympic Games in 1952 and they were played to popularize wrestling in Japan and to distinguish wrestling from professional wrestling. Secondly, the *Japan vs. U.S. wrestling games* were consumed as an amusement by the people who became spectators. This entertainment aspect of *Japan vs. U.S. wrestling games* was created by the amateur wrestlers and supported by popular demand. The fact is that wrestling activities in postwar Japan had two characteristics. One was a return to the international community of amateur sports, related to the condition of Japan as it tried to return to international society as an independent country. The other is that wrestling was consumed as a spectator sport and amusement by people at that time. These two characteristics supplemented each other in the *Japan vs. U.S. wrestling games*. As a result these activities led wrestling to remain in existence in Japan.

Keywords: early postwar period, *Japan vs. U.S wrestling games*, wrestling, player strengthening, popularization, amusement

* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University